



2010年12月 第8巻第11号

かく語りき—聖人の言葉

「すべてのことは、必ず神の意志によって起こります。しかし、人は働かねばなりません。神は人の行為を通じてご自身の意思を表現されるからです。霊性の実践を怠ってはなりません」

(シュリー・サーラダー・デーヴィー
ホーリー・マザー)

「善い人は良いものを入れた心の倉から良いものを出し、悪い人は悪いものを入れた倉から悪いものを出す。人の口は、心からあふれ出ることを語るのである」

(イエス・キリスト)

今月の目次

- ・かく語りき—聖人の言葉
- ・今月の予定
- ・11月の逗子例会
- 『ヒンドゥー教の伝統 マントラ』
スワミー・メダサーナンダによる講話

- ・今月の思想
- ・伊勢巡礼の旅
- ・忘れられない物語
- ・シカゴ大学、スワミー・ヴィヴェーカーナンダに敬意を表する

今月の予定

・生誕日・

スワミー・プレマーナンダジ

12月15日(水)

イエス・キリスト

12月25日(土)

ホーリー・マザー シュリー・サーラ
ダー・デーヴィー

12月27日(月)

スワミー・シヴァーナンダ

12月31日(金)

・行事・

元旦のカルパタル

2011年1月1日 11:30 逗子本館
毎年恒例の行事です。講話、昼食の後、
長谷寺(大仏)や鶴岡八幡宮等を皆で
参拝します。

1月の東京例会

2011年1月8日(土)14:00~16:00 テーマ:バガヴァッド・ギーター(無料)
インド大使館 (03) 3262-2391~7
協会発行の『シュリーマッド・バガヴァッド・ギーター』をお持ちの方はご持参下さい。

第158回ホーリー・マザー シュリー・サーラダー・デーヴィー生誕祝賀会

2011年1月16日(日)11:00
逗子協会本館
講話『ホーリー・マザーの教え方(Holy Mother's Method of Teaching)』

ご家族やご友人をお誘い合わせの上、どうぞご参加ください。心よりお待ちしております。

11月の逗子例会

講話:『ヒンドゥー教の伝統
マントラ』
講師:スワミー・メダサーナンダ
日時:2010年11月21日(日)



日本ヴェーダータ協会では、11月21日(日)、逗子本館で例会を開催しました。当日のプログラムは、午前6時30分に賛歌・輪読・瞑想で始まり、10時30分になると再び瞑想し、11時に賛歌・輪読を行った後スワミー・メダサーナンダによる講話、そしてプラサードの昼食をいただきました。午後は輪読と質疑応答で、その後皆でお茶をいただき、午後6時15分から例会の最後のプログラムとして夕拝を行いました。以下は、午前に行われた講話です。

「今日のテーマは、『ヒンズー教の伝統、マントラ』です。初めにマントラとは何かという定義をお話し、世界の様々な霊的伝統におけるマントラについて説明します。そして、ヒンドゥー教におけるマントラの様々な側面、マントラ実践の目的、マントラの種類や構成、神とのつながり、マントラの具体例、オームの説明、ガヤトリー・マントラ、マントラを選択、霊的イニシエーション、マントラを繰り返す必要性といつ何回唱えればよいか、マントラ実践の様々な方法、マントラと瞑想、マントラ実践の効果をそれぞれ説明します。

霊的求道者には大きく二つのタイプがあります。一つ目のタイプは、イニシエーションを受けるのですがその目的がよく分からない、または目的が分かっているにもかかわらず時々混乱したり思い違いをしたりしてしまうという人です。そ

して、イニシエーションを受けてから時間の経過と共にだんだんやる気がなくなっていくます。もう一つのタイプは、イニシエーションは受けないのですが、マントラって何だろう、などと興味津々な人です。このタイプの人も思い違いをしていることが多々あります。実は、普段からこのような人たちを目にすることがあり、今日の講話のテーマにマントラを選んだのです。

マントラの定義

初めに、マントラの定義を考えてみましょう。サンスクリットではこう定義されています。「Manonath trayate iti mantraha」これは、「マントラを繰り返し繰り返し唱え、その意味を深く考えれば、結果として解脱を得ることができ」という意味です。解脱とは、束縛、執着からの解放を意味します。そして再びこの世に生まれてくることもなくなります。さらに、マントラは私たちを守ってくれ、世俗の海を渡らせてくれます。「manonath」とは何度も何度もマントラを唱えてマントラの意味を考えるとということを表します。

「trayate」は救いや救済を意味します。マントラは神聖な公式で、日本語では「真言」と言われています。マントラという語は英語の辞書にも出ています。マントラは神聖な公式であると同時に、神秘的な公式でもあります。

また、マントラは言葉で説明できな

いものでもあります。言葉を超越しているのです。言葉には限界があり、霊的なことはある点を超えると言葉を超越してしまいます。そして、マントラは神様のお住まいでもあります。私たちの家は木や石などの物質でできていますが、神様の家は神聖な言葉でできているのです。

様々な伝統におけるマントラ

マントラは、世界の様々な宗教的伝統において見られます。仏教では非常に一般的です。例えば、「南無阿弥陀仏」の「南無」とは「ナモー」、つまり頭を下げるという意味です。神様は一人一人の中にいます。ですから、お寺で尊敬の印としてお釈迦様に頭を下げるのと同様に、人々にも頭を下げるのです。サンスクリットでは「ナマハ」と言います。次に「阿弥陀仏」ですが、これは「アミタバ」と「ブッダ」が合わさったものです。アミタバとは無限の光を意味します。「アミタ」とは「無限の」という意味で、「アバ」とは「ジョーティ」すなわち「霊的な光」という意味です。アミタバはお釈迦様、主ブッダの名前の一つです。「ブッダ」とは「目覚めた者」を意味します。私たちは目覚めている時でも霊的には眠っています。これは、私たちが霊的に無知であるためです。悟りの魂であるブッダは、霊的に目覚めている人なのです。これが南無阿弥陀仏の表す意味です。さあ、

皆さんで南無阿弥陀仏を唱えましょう。
(ここで、参加者全員で南無阿弥陀仏を唱和)

どの宗教にも神の御名を繰り返し唱えるという概念があります。キリスト教では二つのマントラがあります。「アヴェ・マリア (Ave Maria)」と「イエスよ、私を憐れみ給え (Jesus have mercy on me.)」です。憐れみ (mercy) とは恩寵を意味しています。では、「Jesus have mercy on me」を皆さんで唱えましょう。(ここで、参加者全員で繰り返し唱和) 次は「Ave Maria」を唱えましょう。(ここで、参加者全員で繰り返し唱和)

イスラム教では1日5回祈りを捧げます。また、ジャパムも実践します。先日私は京都に行き、小規模な宗教会議に出席しました。この会議では、仏教、スーフィズム、ヨーガの代表者らの対話が行われました。スーフィズムはイスラム教の中で最も自由な宗派で、ヒンドゥー教と似ている点が数多くあります。出席者はそれぞれの伝統について互いに話し合ったのですが、パキスタンから来ていたスーフィー (スーフィズムの信仰者) は、スーフィズムの伝統で最も大切な霊的实践は神の御名を繰り返し唱えることであると言っていました。彼らの場合は「アッラー (Allah)」ですが、この伝統はヒンドゥー教と同じです。

さて、この会議で参加者は皆一緒に食事をしました。私はパキスタンから

来たスーフィーの僧侶らに、私たちが毎週日曜の朝、ヒンドゥー教の聖典だけでなく仏教のお釈迦様の教え、聖書、コーラン (ムハンマドの教え) を輪読すると話しました。彼らは、ヒンドゥー教のお寺でコーランを唱えるなんて信じられないと言って、大変驚いていました。私は、私たちが宗教の調和を信じ、信じていると言葉で言うだけでなく実践しているのだと説明しました。彼らはこれを聞いて喜んでいました。

ヒンドゥー教の伝統

次に、ヒンドゥー教の伝統におけるマントラについてお話ししましょう。マントラの詠唱は大変古い伝統です。マントラには長いものと短いものがあり、長いものにはヴェーダのマントラ、短いものにはイニシエーションに用いられるタントラのマントラがあります。ヴェーダの中には数多くのマントラがあり、宗教儀式の際に神への供物として唱えられるマントラもあれば、平和のマントラと呼ばれるマントラもあります。さらに、神の本性について述べているガヤットリー・マントラもあります。そして、私たちの本当の性質についてのマントラ、すなわち「私はブラフマンである、私は絶対の真理である (Aham Brahmasmi)」というのもあります。

マントラの種類は多岐にわたっています。ヴェーダのマントラには、根底

をなす一つの原理であるブラフマンがあります。一方、タントラのマントラには二つの原理、プルシャ (Purusha) とプラクリティ (Prakriti) があり、最終的にこの二つは一つになります。ビージャ・マントラと呼ばれるマントラがあります。ビージャとは種を意味しています。バンヤン (菩提樹) の木の種はとても小さいですが、その中には巨大なバンヤンになる可能性が秘められています。魂も、一つ一つが途方もない可能性を秘めています。あるウパニシャッドでは、たった一つ「オーム (Om)」のマントラだけをテーマに論じているものがあります。オームとは何か、どうやって実践し、実践からどんな結果が得られるのか、それだけを論じているのです。オームはビージャ・マントラ、種マントラの一つで、最も短いマントラです。このビージャ・マントラに神の御名を付け加えた、もう少し長いマントラがあります。例えば、「Gang Ganeshaya Namah」というものがありますが、「Gan」は種マントラ、「Ganesha」は神様の名前です。

マントラを作ったのが誰なのかは分かっていませんが、実は、誰かが作り出したものではないのです。マントラは永遠に存在しています。破壊の時が来てもマントラはなくなり、ただその状態のみが変化します。精妙から粗大へ、粗大から精妙へと変化するだけなのです。マントラは永遠で、聖者のハートの中にだけ現れます。聖者は、

誰が作り出したわけではない、ただ自らのハートにあるマントラを繰り返し唱えることで、神を悟り解脱を遂げたのです。

マントラの中には神の御名が含まれているものがあります。なぜでしょうか。それは、名前と形は離れることができないからです。名と形は同じ現象の一部なのです。例えば、誰かの名前を思い浮かべてみると、その人の姿も一緒に頭に浮かんできますね。同様に、神様の名前も神様自身と離れることはできません。神と神の御名は同一なのです。こんな話があります。シュリー・クリシュナの妻たちがクリシュナの重さを量ろうとしました。天秤の一方にクリシュナを乗せ、もう一方には金(きん)をどんどん積んでいきました。しかし、金を積みば積むほどクリシュナは重くなっていきました。そこで妻たちはトゥルシーの葉 (神聖だと考えられている) にクリシュナの名を書き、金を天秤から降ろして代わりに葉を乗せました。すると、天秤は釣り合ったのです。

この話は、神の御名は神そのものに等しいことを示しています。私たちが神様の名を唱えれば、神様は聞いています。すぐに姿を現さなくとも、神様はずっと聞いていらっしゃるのです。神様はアリの足音でさえ聞こえるのですから。小さな声で、あるいは心の中で神の御名を唱えれば、必ず神に聞こえます。神と神の御名は、本性も性質

も力も同一です。神が神聖で清らかであるように、神のマントラも神聖で清らかです。ですから、信仰心を持ってマントラを唱えれば、神は聞いて下さいます。

言葉には力があります。もし誰かに「君は頭がいいね」と言われたら嬉しくなるでしょうし、「バカ」と言われれば腹が立つでしょう。このように、言葉は単なる音ではなく、特別な力を持っているのです。特にマントラの場合、神秘的な力があります。私たちは、ただマントラを強く信じればいいのです。

マントラの種類

マントラには様々な目的があります。あるマントラは世俗的で利己的な願いを叶えることを目的としており、これを唱えると富と快樂を得ることができます。もっと次元の高いマントラには平和のマントラがあります。例えば「オーム、サハナヴァヴァトウ (Om Sahana Vavatu)」は、最後に平和 (shanti) を3回唱えます。一つ目の shanti は自然を司る神様の平和のため、二つ目の shanti は私たち自身のため、三つ目の shanti は生きとし生けるもののために唱えます。また、道徳的、霊的なマントラもあり、これを唱えると心が浄まると共に神を悟ることができます。イニシエーションに使われるマントラも同様の目的があります。

マントラの一つであるオームは普遍

的なマントラで、キリスト教の「アーメン (amen)」に当たります。アーメンはオームが変化したもので、オームはすべての言語、すべての音の源になっています。オームは、アー (a)、ウー (u)、マ (ma) の三つの音節からできています。「アー」は最も自然に出てくる音です。アーの音から舌を後方へ丸めていくと「ウー」の音になります。そして唇を使って音を出すと「マ」の音が出ます。どの言語でもこの三つの音は同じように発音します。アーは創造の神を表し、ウーは維持の神を、マは破壊の神を表します。また、アーは地球の象徴、ウーは天国、マはその間の場所を表します。さらに、アーは目覚めている状態、ウーは夢を見ている状態、マは眠っている状態を表します。これら三つの音が一緒になって一つの音、オーム (Aum または Om) となると、絶対の真理、トゥリヤ (turiya)、超越を意味します。オームは神聖であり、ヒンドゥー教の儀式、勉強、祈りなどの際には常に使われます。オームは神聖な音であるため、様々なマントラがオームで始まりオームで終わります。

霊的なマントラの一つにガヤットリー・マントラがあります。これは非常に有名で、次のような意味があります。

「絶対なる存在の栄光の光を私たちは瞑想します。天や地やその他のあらゆる創造物を生み出したこの光が、私たちの心とハートを照らし、私たちの力を導いて下さいますように」

マントラを繰り返し唱える

マントラはなぜ繰り返し唱える必要があるのでしょうか。元日に神社にお参りに行きお祈りすればもう十分ではないのでしょうか。私たちの心は世俗的で、世俗のことに関心を持つ傾向があります。つまり、大部分がラジャスとタマスで、サットワはごくわずかです。心の性質を変えて霊性を高めようとしても一晩でそうなれるわけではありません。定期的に繰り返しマントラを唱えて始めて可能となるのです。そうすれば、霊的な波長を吸収してサットワの性質が強くなります。

私たちが世俗的な心であるのは、今世でも前世でも世俗的なことばかり考えていたから、つまり自らが原因なのです。ですから、変わりたいのであれば今から神聖なことをいつも考えるようにすればいいのです。それには、マントラを唱えることが大変効果的です。たまに1回唱えただけでは、世俗的な心に印象づけることができないので、できる限りマントラを繰り返す必要があるのです。私たち僧侶は、イニシエーションを受けるとグルから朝晩最低108回ずつマントラを唱えるように言われ、そうすることを誓います。そしてこれまで、否応なしにずっとそうしてきました。でもそれだけでは十分ではないのです。例えば、マントラを唱えながらもつい他のこと、例えば今日

の予定などについて考えてしまうことがあります。ですから、決まった時間にだけ唱えるのではなく機会がある毎に唱えるようにするといいでしょう。例えば、通勤中や部屋の掃除をしている時などです。マントラは集中しながら常に唱え続ける必要があります。

マントラはなぜ108回唱えるように言われているのでしょうか。それは、108が神聖な数字、神秘の数字だからです。100は全体のシンボルで、5は、土、水、非、風、アーカーシャの5要素を表します。残りの3つは、自我、太陽、月を意味しています。108を数えるのに数珠を使ってもいいでしょう。またマントラの唱え方もいくつかあり、小声で唱える、声を出さずに舌や口を動かすだけにする、心の中で唱える、などがあります。最も良いのは心の中で行うことです。唱えているところを人に見せない方がいいですし、この方法であればいつでもどこでも唱えることができます。声を出さずに口や舌を動かすだけという方法だと、唱えながらも心は他のことを考えている場合があります。でも、心の中で唱えれば、心があれこれ考え事をするのがなくなり、気が散ってもすぐにまた集中することができます。集団でマントラを唱えると、神聖な雰囲気醸し出されそれを自分で感じるできるので、大変良いです。では、皆さんで唱えましょう。目を閉じてオームを唱えましょう。(ここで、参加者全員で繰り返し唱和)

ジャパム

ジャパムを行うのはいつがいいのでしょうか。早朝、夕方、真夜中、そしてお昼頃です。また都合のいい時にいつでも行うことができます。歩きながら、料理や掃除をしながら、お風呂で、電車の中で、などいつでもいいのです。そうすれば世俗的なことを考えなくなり神様につながることができると思います。先ほど言ったように、神と神の御名は同一ですから。ジャパムを通じて神と親しい関係になり神の存在を感じるようになります。

瞑想中にジャパムを行うのが良いとよく言われますが、これには大きな効果があります。背筋を伸ばして目を閉じ、集中しながらマントラをゆっくりはつきり唱えます。ラーマクリシュナのマントラを唱えるのであれば、ラーマクリシュナの姿を心に浮かべながらすると良いでしょう。お釈迦様やシヴァの場合も同じように行うことができます。形のない神を瞑想するのであれば、絶対の真理のシンボルである「オーム」を唱えると良いでしょう。

次に、どのマントラにするか決める必要があります。マントラには、シヴァ、ヴィシュヌ、クリシュナなど様々なものがあり、どれを選べばよいのか分からなくなりがちです。ここに霊的な師、すなわちグルの重要性があります。グルがいれば、グルにマントラ

を決めてもらうことができるからです。マントラを授かる儀式はヒンドゥー教の伝統では一般に「ディクシャー (diksha)」と呼ばれており、これはキリスト教の洗礼式 (baptism) に当たります。イニシエーションでマントラを授かると、グルはマントラと一緒に神聖な力、神秘的な力も授けてくれます。本やCDからではこのような力を得ることはできませんし、自分でマントラを選んだ場合も同様です。グルから授かるマントラは通常、「シッダ (siddha)」マントラで、このマントラを着実に唱え続けることで真理を悟ることができます。また、このマントラの持つ神秘的な力は、グルからグルへと受け継がれてきたものなのです。

グル

グルからマントラをもらうもう一つの利点は、このマントラで本当にいいのかと迷う必要がなくなることです。マントラがグルから授かったものでない場合、数ヶ月経って霊的な進歩が何も感じられないとマントラを変え、さらに数ヶ月後また変える、というようなことが起きる可能性があります。正式に認められているグルからマントラを授かれば、このような迷いや疑念が生じることはなくなります。

グルはガイド、案内役です。山を登る時や大きな森を歩くには、道をよく知っていて実際に歩いた経験のあるガ

イドが必要です。同様に、靈性の道について詳しい知識を持つグルからイニシエーションを受けることが必要なのです。そして、もらったマントラは決して勝手に変えてはいけません。マントラに何か問題あれば、グルに相談しましょう。ただし、本当のグルは神様です。人間のグルは媒介であり、パイプのようなものです。サンフランシスコのラーマクリシュナ・ミッションの会長を務めていたスワミー・アショカナンダジは靈性について啓蒙的な素晴らしい講話をたくさんしていますが、靈性の師として厳しい方でした。ある時、アショカナンダジがある弟子のことを怒りました。弟子は驚いて、グルが弟子に本当に腹を立てることがあるのかと尋ねました。アショカナンダジはこう答えました。「人間のグルは怒ることがあるが、グルの中にある本当のグルである神様は決して怒らないよ。神様は自分の信者をいつでも愛しているのだ…」

イニシエーション

イニシエーションについて、ためらいや誤解のある人がいます。また、イニシエーションは良いものであると知ってはいるが、急いで受けなくとも年を取ってからでいいと考えている人もいます。あるいは、イニシエーションを受けると自由がなくなると誤解している人もいます。本当は若いうちに受

けるのが最も良いのです。長期間真剣に実践して初めて大きな成果が得られるわけですから、精神的にも肉体的にも元気な時に始めるがよいのです。

イニシエーションを受ける信者は、およそ5種類に分けられます。一つ目はマントラをもらってもやがて忘れてしまう人です。中には自分のグルの名前さえ忘れてしまう人がいます。以前私はインドの田舎である人に出会いました。私がラーマクリシュナ・ミッションの者だと言うと、その男性はラーマクリシュナ・ミッションからイニシエーションを受けたと言うので、グルは誰かと尋ねてみました。男性は「ブテシャ・バブーです」と答えただけでした。本当はスワミー・ブテシャナンダジという名前だったのですが、男性は自分のグルの名を忘れてしまったのです。二つ目のタイプは、病気の治癒や家族の幸せなど、世俗的な目的でイニシエーションを受ける人です。このタイプの人には、そういう願いが満たされないと、やめてしまいます。三つ目は真剣でない人。マントラを何度も繰り返すことをせず、できるだけ早く終わらせようとしています。四つ目は真剣だが我慢の足りない人。実践する気持ちはあるのですが継続できません。五つ目は心に強い信念を持ち真剣に我慢強く行う人。これが最も良いタイプです。

ゆっくりと着実に

「桃栗三年柿八年」と言います。マンゴーは実が付くまで15年かかります。マントラも実を結ぶには長い時間がかかりますが、真剣に続ければ必ず結果が出ます。実践を着実に続けることで内なる平和を得ることができます。ハートが浄まるのです。そして、人や物に対する理解が高まり、神への愛が深まります。これらの効果は時間と共に得られ、遂には解脱の道を歩んで行くことになるのです。

マントラを唱えると、否定的な考えや無駄な考え、危険な考えを止めることができます。また、挑発や誘惑を受けた時にマントラを唱えれば心が静まります。マントラがサーモスタットのような働きをします。いざというときにマントラが出てくるようになるには、常にジャパムを実践しておく必要があります。そうでないと、必要な時にすぐに出てきません。ジャパムをいつも実践していると心が浄まり神への愛が育まれ、神様と親しくなることができますのです。

悟りは突然開くわけではありません。解脱の道は少しずつ進む必要があります。お金があればインスタント・コーヒーを買うことができますが、インスタント・サマーディーはないのです。霊性の道はゆっくりと着実に進まねばなりません。それにはマントラが大変役立つのです。霊性の道には高飛びも幅跳びもなく、ただただひたすら歩

いて行くしかないのです。これが「マントラ・サーダナー」、マントラ実践の秘訣です。

今月の思想

興味深い矛盾だが、自分をありのままに受け入れる時、自分が変わることができる。

(カール・ロジャース)

伊勢巡礼の旅に参加された皆様へのご報告



伊勢神宮

(編集者注：この記事は、伊勢巡礼の旅をスワーミー・メダサーナンダと共に企画された泉田香穂里さんが、旅行後参加者の皆さんにeメールで送られたメッセージです)

皆様、伊勢巡礼の旅では大変お疲れ様でした！ おかげさまで無事に伊勢神宮参拝を終えることができましたのでご報告致します。



厚見氏（中央、白い和服の方）

奈良先生からご紹介して頂いた神宮本庁のスタッフの厚見さんは、大変細やかな気配りをなさる方で、こちらからの沢山の質問にいつも迅速に答えてくださり、綿密な打ち合わせができました。その後、厚見さんと課長の岩橋さんと神宮本庁で打ち合わせをし、伊勢神宮の神主である大野さんをご紹介して頂き、更に具体的な打ち合わせができましたので初めての伊勢参拝も滞りなく行う事ができました。奈良先生には本当に感謝しております。最終的な参加者は、関東圏の方と多治見の方、それに石川県や三重県地元の方とあちらこちらから集まり、総勢24人にもなりました。



(湾岸長島パーキングエリア、レストラン)

初日（11/27）、朝6時に協会からワゴン車2台で出発、車内で朝拝と朝食をとり、途中三重県の伊勢湾岸自動車道の湾岸長島PAにおいて多治見の方たちと合流して昼食をとり、大きな渋滞にもはまらず予定通り14時30分頃到着。15時から16時半まで外宮内を神主である大野さんの説明を交えながら参拝しました。



参拝後はそのまま予約宿へ行き、ミーティング、輪読、チャンティングなどを行いました。今回お伊勢マラソンと重なり、宿は大変取りにくかったのですが、とてもおもてなしのゆき届いたアットホームな宿でした。こちらからの細かい注文を出したお料理も豪華で美味しく二見浦の海に面していたため、早朝の夫婦岩散歩をされた参加者もありました。私もまだ暗いうちに夫婦岩に行き、群青色の空に輝く月と星の光に照らされた水面を見て早朝にベナレスで沐浴した時の事を思い出しました。



内宮に入ってまもなく、五十鈴川御手洗場で見事な紅葉に囲まれた輝く五十鈴川を目にし参加者一同テンションがあがりました。またマハラジは、参加者全員に川の水をふりかけインド式に参加者全員を祝福してくださいました。ここでも集合写真を撮りましたので写真を添付させていただきます。



二日目（11/28）は、お伊勢マラソンで大渋滞や人ごみを予想していたので、朝6時10分からチャンティング、ギターの朗誦等をして朝食をとり宿を出発、8時から内宮の参拝をさせていただきました。内宮に着いたのが早朝ということもあって、朝もやの中に神々しい日の光に照らされた宇治橋鳥居をくぐり、そこはまさに静かで落ち着いた別世界です。



神楽殿では、みなさん初めてのお神楽を拝見させて頂き、その歌舞の美しさや巫女の静かですばやい身のこなしや神聖な雰囲気感動しました。その後、お神酒を頂いたのですが、これは「代表者だけと」言われ、マハラジの代わりに私が1杯頂いて隣を見ましたら、みんな次から次へと頂いており、結局ほとんどの参加者がお神酒を頂いてしまいました。これは恥ずかしい失



態でしたが、みなさんちょっと得をした様子で喜んでおりました。



また御正宮では御垣内参拝をさせて頂き、マハラジと私はダライ・ラマ法王十四世と同じ場所、白い石の上に立たせて頂きました。でもここは神様がお通りになる道との事だったのでそこに立つのは恐れ多かったです。ここで暫く黙祷をさせて頂き、更に御垣内から出てからもまた黙祷させて頂きました。御正宮では、本当に言葉では言い表せないほど不思議な感覚を覚えました。マハラジは伊勢神宮参拝で、終始静かにその神聖な波動を堪能していた様子です。

私達の約 8 割が初めての参拝だったので、興味深く大野さんのお話を聞きながら、また自然のすばらしさに感激しながら思い思いに楽しんでいました。参拝後、大野さんにはお礼の品として、協会から数冊の本をプレゼントさせて頂きました。

この日は公式参拝なので皆さんスーツ姿で窮屈そう、私もジャリ道で靴が傷ついたり、スーツが泥だらけになりましたが、それには代え難い貴重な体

験をさせて頂きました。

公式参拝も無事に終わり、その後昼食の予定時間が大幅に過ぎていたので、急いでおかげ横丁の「海老丸」というお店に全員で向かいました。当初は「とうふや」という豆腐会席のお店を予定していましたが、ここは早くから予約が一杯でとれませんでした。「海老丸」においては、豪華な漁師汁と海老フライを頂き、とても美味しかったです。その後予定にはありませんでしたが急遽「自由時間」を持ち、みなさんおかげ横丁で思い思いにショッピングを楽しんでおりました。そして 14 時頃伊勢を出発し、途中約 60km の事故渋滞はありましたが、途中サービスエリアで夕食や休憩を取り、時間調整をしながら協会に、到着したのは 23 時を少し過ぎていました。今回運転をして頂いた方には感謝です。お疲れ様でした!!



1 泊 2 日という短い時間でしたが、貴重な公式参拝とマハラジと共に過ごした楽しく神聖な時間は、私達の宝になったのではないのでしょうか。

今回参加者する事ができたのは、タクールからのご褒美だと感じました。

タクルの沢山の恩寵に包まれた幸せな旅でした。又、当日までキャンセルや飛び入りがあり、私達が自分で行動しているようでも「神が私達をお使いになっている」わけで、「全ては神の思し召し」なのですね。

皆様のご協力のおかげで無事終了する事ができた事を感謝しております。日々寒くなって参りましたので、皆様どうぞご自愛くださいませ。

敬具

12月2日 泉田香穂里（シャンティ）
（スワミー・メーダサーナンダより：「このレポートは、巡礼の旅を企画された泉田香穂里さん（シャンティさん）が執筆されたものです。シャンティさんのご尽力のおかげで旅程はスムーズに進み、実り多い楽しい旅となりました」）

忘れられない物語

1分の知恵

「1分の知恵などというものがあるのでしょうか？」

「確かにあるとも」師は答えました。

「でも、1分なんて短すぎるのではありませんか？」

「59秒長すぎるくらいなんだよ」

困惑する弟子たちに向かって師は言いました。「月の姿を見るのにどのくらいの時間がかかるかね？」

「では、なぜこのように長い年月が

霊性の修行にかかるのですか？」

「目を開くのに一生かかることがあるのだ。見ることそのものは一瞬で終わる」

これらの物語に出てくる「師」は一人の人間ではない。彼はヒンドゥー教のグルであり、禅の老師であり、道教の賢者であり、ユダヤ教のラビであり、キリスト教の修道士であり、スーフィズムの修道僧である。彼は老師であり、ソクラテスであり、ブッダであり、イエスであり、ツァラトウストラであり、ムハンマドである。彼の教えは紀元前7世紀にも紀元後20世紀にも見られ、彼の知恵の源泉は西洋にも東洋にもある。過去の歴史に彼の存在の記録が残っているかどうか、果たして本当に重要なことだろうか。歴史とは結局、出現の記録に過ぎず、絶対の實在の記録ではない。教義の記録であり、沈黙の記録ではないのだ。

（Anthony De Mello S.J.著）

シカゴ、スワミー・ヴィヴェーカーナンダに敬意を表する

インド、コルカタ テレグラフ紙
Basant Kumar Mohanty 記者

（11月20日ニューデリー発）インド政府は、スワミー・ヴィヴェーカーナンダの理想の普及を目的として、シカゴ大学に教授職の新設を希望していることを明らかにした。シカゴは、

ヴィヴェーカーナンダが 117 年前に記念すべき重要な演説を行った地である。

在シカゴ インド総領事館は、宗教間の対話を主な目的とする教授職の新設について、現在、大学と連絡を取り合っている。

ヴィヴェーカーナンダは、1893 年 9 月 11 日にシカゴで開催された世界宗教会議で演説を行い、ヒンドゥー教を「寛容と普遍的受容を教えとする宗教」と紹介した。

「アメリカの姉妹兄弟の皆さん、このように温かく誠意あふれる歓迎を受けて皆さんの前に立つことができ、私は今、言葉で言い表すことができないほどの喜びで胸がいっぱいです」この言葉で、ヴィヴェーカーナンダは演説を始めた。「世界最古の僧団の代表として皆さんにお礼を申し上げます。諸宗教の母の名の下に、ヒンドゥー教のあらゆる階級と宗派の幾百万の人々の名の下に、皆様にお礼を申し上げます」

同国のインド文化省高官はテレグラフ紙に次のように語った。「我が国の総領事館は現在、教授職の設立についてシカゴ大学と協議中です。(中略) インドは、シカゴ大学で毎年ヴィヴェーカーナンダの講演を行うために寄付を実施し基金を提供する可能性もあります」

同国が提案する教授職は、同国が計画するヴィヴェーカーナンダ生誕 150 周年祝賀プログラムの一環である。

インド文化省の関係筋によると、イ

ンドでは全国的な価値教育プログラムが計画されているほか、1863 年～1902 年という短い生涯を終えたヴィヴェーカーナンダに関する特別映画も予定されている。

マンモハン・シン首相が委員長を務める国家委員会とプラナブ・ムカジー財務相が会長を務める実行部会が様々なプログラムの実施をリードする予定で、2013～2014 年が活動のピークとなる。

祝賀プログラムは数ヶ月以内に開始の予定で、インド国内だけでなく海外でも実施される。フーグリ川沿いにある、ラーマクリシュナ・ミッションおよびラーマクリシュナ・マート本部ベルル・マートでは、セミナーや青年会議など様々な価値教育プログラムを全国で実施していくと、文化省関係者は語った。

発行：日本ヴェーダーンタ協会

249-0001 神奈川県逗子市久木 4-18-1

Tel: 046-873-0428

Fax: 046-873-0592

Website: <http://www.vedanta.jp>

Email: info@vedanta.jp